

実践 がんサバイバーシップ 患者の人生を共に考えるがん医療をめざして

日野原重明●監修 山内英子、松岡順治●編

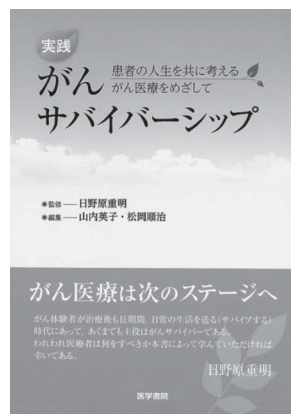
〔評者〕堀田知光(国立がん研究センター・理事長/総長)

わが国でも「がんサバイバーシップ」という概念がようやく普及し始めている。がんサバイバーシップとは「がん経験者がその家族や仲間とともに充実した社会生活を送ることを重視した考え方」を意味している。かつて、がんは不治の病として長期の入院などにより患者は社会から切り離されてきた。しかし、今では早期発見や治療法の進歩などにより生存期間が延長し、多くのがんは長くつきあう慢性疾患として、がんとともに暮らすことが普通の時代になりつつある。

がん体験者は患者であると同時に生活者であり、社会人でもある。2012年に閣議決定された第2期がん対策推進基本計画では、「がんになっても安心して暮らせる社会の構築」が全体目標の1つに加えられた。今日、がんは日本人の死亡原因の第1位で年間に約36万人ががんで死亡しているが、一方で、直近のデータでは2014年に約81万人が新たにがん罹患者と推計されている。したがって年間に約40万人以上のがん経験者が増える計算になる。就労を含めたサバイバーシップの充実は大きな政策課題といえる。

本書はがんサバイバーシップ先進国である米国で乳腺外科医として多くの経験を積んでこられた山内英子医師を中心に、多職種の第一線の医療従事者、がん経験者および患者会、サポート組織など「患者の人生を共に考えるがん医療をめざす」関係者が自らの実践を通して書き上げたがんサバイバーシップのための手引き書であり、さまざまな課題に対する処方箋が盛り込まれている。章立てとして、初めに米国とわが国におけるがんサバイバーシップの歴史と発展について紹介し、2編「がんサバイバーシップの実践」では治療の後遺症や二次性発がん、就労や経済的な問題、精神的な問題などについて課題と対応策がわかりやすく書かれている。各職種に求められる関わりの章では医師、看護師、薬剤師、ソーシャル・ワーカー、理学療法士、作業療法士などそれぞれの職種に求められる役割について実践的に書かれている。また、本書の特徴として、4編「患者、家族とともに発展するサバイバーシップ」で患者自身の体験や患者会としての活動などが紹介されている。

「がんサバイバーシップ」への



取り組みはわが国でようやく広がりを見せている。しかし、がんサバイバーシップをどう捉え、どのように取り組むべきかについて体系化された書籍はまだない。その意味で本書はその先導役を担う役割を持つと期待される。がんサバイバーシップに少しでも関心を持たれた方に、ぜひお薦めしたい1冊である。

A5 256頁 2014年
定価：本体3,500円＋税
[ISBN 978-4-260-01939-2]
医学書院刊